＜みん・みん会員だより＞　NO. 36（2022. 12. 24）

2023 年もご支援・ご協力をお願いします！

～上流は下流を思い、下流は上流に感謝する木曽川・飛騨川・愛知用水の交流・連携を～

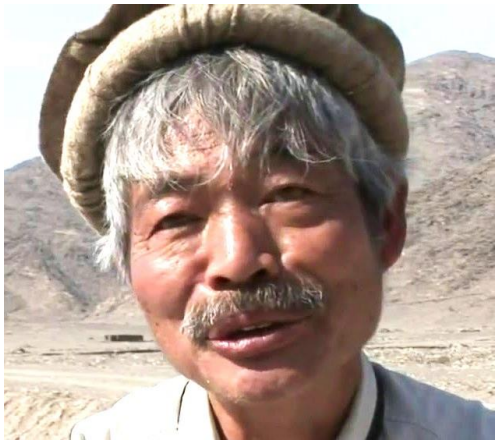
2022 年９月 25 日（日）午後２時から「ソーネ・おおぞね」ホールで、みん・みんの会の第 12 回総会を開催しました。総会では①2021 年度活動報告　②2021 年度会計報告（収支決算）　③「木曽川流域水源の里基金」の報告と今後の運用について　④2022 年度活動計画　⑤2022 年度予算など、報告・提案を行い、承認されました。

続いて、木曽川上下流交流・連携の集いを行いました。

はじめに、ペシャワール会名古屋会長の五井泰弘さんから「アフガンを緑の大地に」「武器で平和は作れない」と「現地の人びとの立場に立ち、現地の文化や価値観を尊重し、現地のために働くこと」を 40 年近く行ってきた 2019 年 12 月に銃撃で命を奪われた中村哲医師の「生き方」とアフガニスタンの現況を語っていただきました。

続いて、日進市議・山根みちよさんに５市町で作られている愛知中部水道企業団の１トン１円の取り組みや木祖村との交流・連携を発題してもらいました。

ペシャワール会名古屋会長・五井泰弘さんのお話を聞いて



五井さんのお話で印象深かったのは、中村哲さんとペシャワール会の「哲学」です。イスラームの伝統社会、部族社会を否定しない。先進国の価値観を押し付けない。不完全な他者／己を受け入れること。そして医療と農業支援に徹すること。農業で食っていければ、貧困と飢餓から抜け出し、子どもに教育を受けさせ、アフガニスタンに平和が近づく。そのさい、日本から物を持ち込まない。必要な資材は現地で購入して、現地経済に貢献する。蛇籠や斜め堰のように、現地の人たちが習得できる技術と、維持管理できる仕組みにこだわってこられた。

医師・中村哲さんとペシャワール会の偉大さは、その事績を回顧することで改めて実感される。

1984 年から 2019 年に亡くなられるまで、中村さんはアフガニスタンのために尽くされた。当初、旧ソ連のアフガニスタン侵攻（1978 年）でパキスタン北西辺境州に逃れた難民を支援、ハンセン病患者の治療と僻地医療に従事された。ダラエヌールなど山岳無医村に診療所を設立、98 年ペシャワールにＰＭＳ（ペシャワール会医療サービス）基地病院を設立された。2000 年、荒廃したアフガニスタン農業に記録的な大干ばつが追い打ちをかけた。中村さんは医療活動に加えて、井戸や灌漑など水源確保事業に傾倒していく。そして 2001 年同時多発テロ。アルカイダ掃討で米英軍が大規模空爆をはじめると、中村さんは食糧配給計画「アフガンいのちの基金」をよびかけた。日本から寄せられた空前絶後の寄付をもとに、15 万人分の食糧を配給した（自衛隊派遣は有害無益）。2002 年、アフガニスタン東部農村復興のための「緑の大地・５か年計画」を発表。2003 年マルワリード用水路着工、中村さんみずから重機を動かす。2009 年終点ガンベリ砂漠まで通水、ＰＭＳガンベリ農場設立、マドラサ開校…、2019 年 12 月 4 日、ジャララバードで武装勢力に銃撃され死去される。

中村さんは、武器によらず日本ができることは何かを、私たちに教えて下さった。誰もできないことを生涯かけてやった。強靭な意思に貫かれた人生でした。中村さんは「利他の人」です。私は、この人に賭けたいと思った。希望が見えない時代に、他者の幸福のために体をはって生き、亡くなられた。私にとって希望の星でした。ご冥福をお祈りするとともに、五井さん、ペシャワール会の皆様の益々のご活躍を願っています。（杉原　航）

＊「『平和には戦争以上の力があり、平和には戦争以上の忍耐と努力がいる』――中村さんが繰り返し語った言葉です」と『カカ・ムラド～ナカムラのおじさん～』（双葉社）に紹介されています。ウクライナや他地域の戦争の

現実に、私たちは実践の中から語られている「中村さんの言葉」を受けとめて生きたい。

１㎥１円基金で、年間約３千万円を森林保全整備に

私の住む愛知県日進市と長野県木祖村は自治体友好提携を結んでいるが、コロナ禍のせいでめっきり交流が途絶え淋しい限りである。そんな折の 2022 年９月 13 日、唐沢一寛木祖村村長が日進市を訪問された。引退のご挨拶ということで、商工会と市役所を訪れ、関係者と面会された。残念ながら私は所要のため駆けつけられなかったが、市長や市の幹部とともに議員らも馳せ参じ、再会を喜び、退任を惜しんだ。村長は花束や果物を贈られ、皆さんと記念写真に応じ、感極まった表情をされていたという。

そして、「木曽川流域上下流交流の集い」を開いた９月 25 の翌々日、木祖村では村長選挙の告示があり、10 月２日には元副村長の奥原秀一氏が新しく村長に就任された。ひとつの時代が終わり、また新しい時代が始まる。

時代は変われども、木曽川や愛知用水でつながったご縁は続く。愛知県豊明市、日進市、みよし市、長久手市および東郷町の地域の住民に、上水道の供給を行っている愛知中部水道企業団では、圏内約 30 万人に１㎥１円を加算し、年間約 3000 万円あたりを基金として積み立てている。これらの財源は水源地域の森林保護・育成などに充てている。私たちは知らない間に、「水づくりは森づくり」運動に参加しているのだ。たしかに木曽の水は美味しいし、この基金の成り立ちをどれほどの人が知っているかはわからないが、水道料金が高いと文句を言う人はいない。未来永劫、続くと良い！

今回のみん・みんの会総会で、名古屋市が木祖村に木製の机や椅子の発注をしたと聞いた。実は日進市と木祖村との交流は「日進平成の森」の枝打ちや間伐に年間 300 万ほど、そして市民向けには木祖村で宿泊した際に宿泊料金の一部を助成する事業を実施しているが、令和元年には 744 人利用していたが、令和３年には 17 人と減少していて、先細りの状態。そんな中で、名古屋市との交流に活路が開かれている状況に安堵した。

山根みちよ（日進市議）

春の蔵開き、夏の木曽音楽祭、手仕事市･･･、木曽にも賑わいが！

「地域の食文化に誇りをもって自慢してください」（はっこうのがっこう）

木曽の夏は短く、木曽節にも「夏でも寒いヨイヨイ～♪」と唄われています（近年は温暖化で木曽もずいぶん暑いですが）。そんな木曽の夏といえば「木曽音楽祭」と「木曽の手仕事市」です。大きなイベントとして長年開催されてきました。しかしながら一昨年はコロナウィルスの影響で、昨年は大雨被害で開催出来ませんでした。

音楽祭（８月 25～28 日）は毎年この時期に行われていて、今年で第 48 回の歴史があります。大自然の中に日本の一流のクラシック音楽が鳴り響き、お客様からも「やっぱり音楽祭がないと夏が終わらないね」と、待ちに待った音楽祭に大満足でした。フィナーレではスタンディングオベーションで鳴りやまぬ拍手が開催の喜びや演奏の素晴らしさを物語っていました。

手仕事市（９月３～４日）は今年で 15 回目でした。以前は音楽祭と同時開催でしたが、年々規模が大きくなってきたこともあり、1 週間ずらしての開催になりました。10 年ほど前から町の賑わいを目的に空き店舗や庭先などを利用し、全国から来たクラフトマンが出店する形でやってきていて、今年もたくさんのお客様が町内を歩いて大賑わいでした。スタッフも人との繋がりや、開催できた満足感でいっぱいの２日間でした。

２つの酒蔵と小池糀店の「春の蔵開き」も小規模ながら開催で

きましたし、「はっこうのがっこう」（12/10）も日本の発酵研究の第一人者３人を迎えて開かれました。「はっこうのがっこう」というと、当店や酒蔵を見学したり、木曽のすんき漬けをはじめ、各地域（世界）の様々な発酵食品を食べたりしながら、みんなでワイワイしながら勉強していく形態でやってきました。今回はその形態ではできませんでしたが、大学の先生方を囲み発酵の勉強をしました。その中で印象に残ったのが「地域の食文化に誇りをもって自慢してください」でした。また、今年はすんきコンクールも行われ、44 点ものすんきが集まり、どれも美味しくて順番をつけるのに苦慮したそうです。コンクールとは別に、地元の伝統的な食品を子供たちが、カブの栽培からしてすんき漬けまでやったという上松小学校のすんき作りの活動も紹介されました。

「地域に根付いてきたものを子どもたちが、また作っていく」･･･何か忘れていたものを思い出させてくれるような気がして、今回の「はっこうのがっこう」をまとめていたような活動にとても感銘を受けました。

（小池糀店　唐沢　尚之）

味噌仕込み講習会～「ソーネおおぞね」で開催～

11 月９日に名古屋市北区にある「ソーネおおぞね」で味噌づくり講習会をさせていただきました。当初、参加者は 10 名ほどの予定でしたが、嬉しいことに最終的には合計 40 名近くの参加者希望となりました。1 人で 40 人への指導は難しいので午前と午後の２回に分けての実習会となりました。それぞれ約２時間の講習会＝**写真**＝でした。

前日に煮ておいた大豆を手回しの粉砕機で潰して量り、それと糀と塩を混ぜてボールにしたものを桶へ投げ入れて仕込みました。大豆と糀と塩を混ぜるのは本当に重労働です。混ぜるというより、こねる感じで私も皆さんと一緒に力いっぱいこねての作業でした。

参加者の多くは自家製味噌づくりは初体験で「こねるのが大変」とか「でも意外と簡単にできるのね」などいいながら賑やかな作業でした。仕込み終わって、これからどう寝かせばいいの？何で美味しくなるの？など、味噌や発酵の質問が飛び交う楽しいひと時でした。

ソーネおおぞね＝**写真**＝は、名古屋市北区にある「パンとみんなとしげんカフェ」をコンセプトに掲げる地域のコミュニティスペースです。カフェやショップ、そして奥には今回講習会を行ったホールもあります。キッズスペースもありファミリーでのご利用されている方もたくさんいらっしゃいました。お昼の日替わりランチはとてもおいしくお値打ちです。ショップは地産地消を掲げて地元野菜がたくさん並んでいます。木曽川上下流交流の品物として当店製造の味噌や甘酒も販売しています。

大曽根団地内ということもあり、たくさんの方々が集まる賑やかな空間です。皆さんもぜひ足を運んでみて下さい。https://sone-ozone.com/　　（小池糀店　唐沢　裕之）

「何百年脈々と受け継がれた種のバトンを絶やさぬために」

～伝統野菜「吉野蕪」、「芦島蕪」を子どもたちと育て、種を繋ぎたい～

山田百合香（上松町）

私は東京で育ち幼少期から田舎暮らしや自然への憧れが強く、大学で自然科学と農学を学び、卒業後はグアテマラ共和国で青年海外協力隊➡東日本大震災被災地の復興支援➡長野県木曽郡上松町地域おこし協力隊➡信州大学農学部修士号取得し同町で暮らしています。

赤かぶを収穫する上松小学校４年生

木曽郡では塩を使わない乳酸発酵の漬物すんきや赤カブ漬けの原材料である赤蕪（かぶ）６種が「信州の伝統野菜」に認定されており、内２種が同町の「吉野蕪」、「芦島蕪」なのですが市場に出回っていません。その上に生産者さんがそれぞれ２、３軒(70 代）と１軒(80 代)という今にも貴重な遺伝資源が途絶えそうな現状を打開すべく、私は地域おこし協力隊の頃より県の農業普及員さんや信州大学農学部さんと協働しながら普及活動を行ってきました。

協力隊退任後は、社会人学生として同大学院で研究を行う傍ら、地元小中学校に教育素材として取り扱って頂けないか提案。今年度から上松小学校４年生の総合の時間で「上松町の赤かぶ」を取り上げて頂くことになりました。仕事の合間にボランティアとして授業の調整役を担い、農業普及員さんに信州の伝統野菜の授業を行って頂いたりしてきました。

また、生産者さん方の指導を受けながら、種から２種の赤かぶを育て、収穫後は木曽の伝統食であるすんきの漬け方を教わり、すんき歴うん十年のベテラン農家さんと肩を並べ、小学生がすんき品評会に参加、特別賞「すんき名人の卵」を受賞しました。今後は漬けたすんきを同町小中学校給食等で提供して、年度末の総まとめ(授業参観)に向け、この体験を次世代に繋げる総まとめをしていく見通しです。

協力隊活動の中で出会った世界中どこにも同じものがない上松町唯一無二の遺伝資源「吉野蕪」「芦島蕪」。ヨソモノの自分がその大切さを説くより、地域を想う未来の担い手の子どもたちが語るとその可能性がより無限大になることを実感しています。

映画評

『 木 樵 』

～森林の経済的価値を生み出す“木樵（きこり）”。温もりを感じる映画。
映画の中の面家さんは本当にいい顔だ～

私は「水源の里を守ろう　木曽川流域みん・みんの会」に所属している。みん・みんの会は“森は水の源、水は命の源、川は命のつながり”をモットーに、上流の山間地で暮らしながら森を守り、「水」を支えている人びとに感謝し、まなざしを向ける会だ。「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」を合言葉に、木曽川流域（木曽川、飛騨川、愛知用水）の上下流交流や連携を目的に活動している。

ドキュメンタリー映画『木樵』の主人公・面家（おもや）さん＝**写真**＝が“木樵”として生計を立てている高山市滝町は、日本海に注ぐ神通川流域になるが、感謝する気持ちに変わりはない。間伐などの手入れがされた人工林の山は雨水が土壌に染み込む。その植物プランクトンを含んだ栄養源豊富な水が川から海へ流れ、豊かな漁場へと繋がっていく。荒れ果てた山や伐採後に放置された山は、雨水が土壌に蓄えられず地表を流れてしまう。

映画で語られるが国内の木材価格は最盛期の４分の１らしい。価格競争だけだったら全く割りに合わない商売だ。しかし、面家さんたち木樵は誇りをもって仕事をしている。森林の経済的価値は、生み出すお金

だけでなく、土砂流出を抑え、二酸化炭素を吸収し、水産資源を育んでいることを知っているからだ。

映画の中の面家さんは本当にいい顔だ。CINEX 映画塾で本物の面家さんにお会いしたが、映画以上にとってもハンサム。朴訥な方なので、私が偉そうに講釈を

垂れているような「森林を守ることが何故大切か？」なんてことは一切おっしゃらない。愛妻弁当を美味しそうに食べる姿はチャーミングの一言だ。

場内で笑いが起こったのは、面家さんの奥さん（関市出身）が嫁いだとき「飛騨弁が全然わからへんかった。だちかんって何？」。

私のような「じゃんだらりん」の三河弁エリアの人間からは、みんな「やってまった」にしか聞こえないが、どうやら違うらしい。温もりを感じる映画だ。

（三田　正継）

只今、木曽青峰高校インテリア科3年生5人が木製玩具づくり進行中！

私たちは木曽川流域水源の里基金の運用として、木曽青峰高校インテリア科に木製玩具やベンチづくりを依頼しています。今年度は３年生５人の男子生徒が木製玩具づくり進行中です。2022 年７月１日に、名古屋市科学館の山田さん、木曽広域連合地域振興課の奥牧さんと一緒に、インテリア科の山下先生と５人の生徒さんと話し合いました。2023 年１月 13 日に山田さんと共に高校に行ってきます。どんな作品が出来つつあるのでしょうか。

ワクワクします。2023 年の２月中旬か下旬、科学館に贈呈することになります。楽しみです！（事務局）

11 月に大豆の殻たたきを行いました！

５月下旬に種まき、６月中旬に苗の定植、７月と８月は草取り、そして 10 月 22～23 日に大豆の収穫を経て、11 月 12～13 日、大豆の殻たたきを行いました。

木祖村の空は、天候が下り坂とは思えないほどきれいな青空でした。

木祖村・高原荘の笹川さんは、朝から露よけのシートをはずして「はざ」にかけた大豆を乾燥させ、“とうみ”や脱穀機＝**写真**＝など様々な道具の準備をしておいてくれました。

天候が危ぶまれる中、一日目は晴天に恵まれ昼前から作業に取り掛かり、在来種とすずほまれの２種類の大豆の殻たたきを脱穀機でおこないしました。足漕ぎの脱穀機は二人がかりで勢い良く大豆をさやからたたき出していきます。勢いあまってさやごと飛んでいきますので、豆を集める人は大変でした。脱穀機にかけ終えたらあたりがすっかり暗くなっていました。

二日目、朝から雨の予報が外れ、急いで脱穀した大豆を “とうみ”にかけました。畑の片付けと赤かぶの収穫を行い、今回の作業はひと段落。選別前の収量は、在来のみそ豆 22.5 kg、すずほまれ 26 kgでした。

ともに昨年より４割増収でした。ただ相変わらず虫食いも多く選別後の収量は予断を許さない状況です。翌週の 19 日、やり残した黒豆の殻たたきを行い、６kgほどの収量でした。

黒豆はかなり歩留まりは悪く５～６割と思われます。それでも昨年の倍増となる見込みです。

毎年、上松町にて大豆の機械選別をしていただいています。私たちの大豆は虫食いや大きさの不ぞろいなどで大変難儀な作業を引き受けてくださっています。この紙面にて改めて感謝いたします。（楽作隊　近藤）

＊昔から私たちは味噌、しょうゆ、豆腐、納豆、煮豆、枝豆…などとして、大豆を食べてきている馴染みの作物です。しかし、自給率はどうして低いのでしょうか。

日本の大豆の年間需要量は 2020 年が約 350 万トンで、その内訳は 65%（229 万トン）がサラダ油など、30%（105

万トン）が味噌、しょうゆ、豆腐などの食品用として使われています。

2020 年の国産大豆の生産量は 21 万 1 千トンで、ほぼ全部が食品として使われています。食品用の自給率は 20%ですが、全体では６％です（日本の食料自給率は 38%）。こんなに身近な作物である大豆が…、この現状をどう思われますか！？

お正月には黒豆が欠かせません。黒豆も大豆の仲間です。私たちの畑でも、少量ですが作っています。「今年一年マメに暮らせますように」の願いが込められています。節分のときにも「鬼は外」と大豆を使います。鬼を退治した後は年齢の数だけ炒った大豆を食べます。秋には五穀豊穣に感謝する祭りが行われます。五穀とは「米、麦、あわ、ひえ、大豆」です。

みなさん、一緒に作ってみませんか。

木曽川源流の里・長野県木祖村に私たちの約 180 坪の畑があります。地元の人たちの支援を受けながら、大豆や黒豆、ポップコーン、かぼちゃ、赤かぶなどを作っています。標高 1,100 メートルの大地で、思いっきり大自然を味わいませんか！

晴れた夜空には、満天の星座が私たちを迎えてくれます。夏は天の川、「大三角」など、秋から冬にかけてはオリオン座、おうし座など、魅力いっぱいです。

☆2023 年度の「みん・みん楽作隊」への参加や木祖村の畑の作業に参加希望の方は、近藤（090-4150-6156）までご連絡ください。日帰り参加も歓迎です。

収穫した大豆は木曽町の小池糀店で味噌「みなもと」に！

木曽川源流の里・木祖村で、2011 年から畑を借りて大豆づくり

＜2022 年のご支援・ご協力に感謝しています。今後もよろしくお願いします＞

2023 年は、みん・みんの会にとって、15 周年の年にあたります。2008 年９月にスタートして、皆さんのお力添えをいただきながら、木曽川流域の上下流交流・連携を取り組んできました。感謝申し上げます。

これからも木曽川・飛騨川・愛知用水流域の上下流交流・連携をゆっくりと持続的に一層進めていきます。

皆さんのご支援、ご協力をお願いします。

水源の里を守ろう　木曽川流域みん・みんの会

連絡先：〒464－0075　名古屋市千種区内山３－７－11　斎藤事務所気付

TEL　052－745－1001　　FAX　052－741－2588　　mail：suigennosato@gmail.com